

—村史こぼれ話 2—

オウレン（植物）

県立歴史博物館（長岡市）では、近世の越後各地の産物を展示したコーナーに弥彦の「おうれん」が紹介されています。「おうれん」とは何か、調べてみると、

オウレンはキンポウゲ科小形の多年草本で、根茎は太く黄色味を帯びる。葉は常緑で硬く、上面は少し光沢がある。花茎はやや太く、紫色を帯び、1～3個の花がある。株には両性花のものと雄花をつけるものがある。がく片は5～7個でひ針形、白色の花弁状。花弁はがく片より小さく5～6個、白色、さじ形。根茎は薬用になるので採取がはげしく、近年少なくなった。（『弥彦の花』より紹介）

根茎を採集し細根を焼去して乾燥したものが^{きよくがたしやうやく}局方生薬のオーレン（黄連）で、苦味性健胃剤として用いられる。またキハダと同様に、古くは黄色染料として盛んに用いられた。（『有用植物分類学』より）

元治元年（1864）に刊行された^{えちごみやげ}『越後土産』初編^{さんぶつみたて}「産物見立取組」（相撲の番付表に見立てて、越後各地の特産物を紹介したもの）に「弥彦黄連」と見える。また、宝暦6年（1756）に書かれた^{えちごなよせ}『越後名寄』の「黄連」項目に^{そのほか}「弥彦山^{たいてい}其外山々大抵生、皆北面二在」とある。

弥彦山一帯は植物分布からみると、冷温帯と暖温帯がぶつかり合っているため、さまざまな植物の宝庫といわれてきました。しかし最近では、心ない人たちの手で自然が荒らされ、絶滅の危機にひんしている植物も少なくありません。これらの動植物には、「ヤヒコ」の名前を冠したものがいくつかあるようです。ご存知でしたらお知らせください。